

新選 国語辞典

新版

78
41.595
347

新 版
新選国語辞典

2754/15



編者のことば

今日の民主的な社会では、ことばによる通じあいということが、きわめてだいじなことになってきました。人人が日話したり、聞いたり、書いたり、読んだりすることばの量はますます多くなり、それと同時に、ことばの混乱がはげしくなってきたといわれています。われわれの国語の将来を思い、われわれの文化の向上を願うとき、国語の学習はいよいよ重要なものとなり、ことばの正しい使い方は、いつそうたいせつなものとなつてきます。こうした際に、その道しるべとなるような適切な有力な国語辞典が要求されることはいうまでもありません。

ところが、「国語辞典もたくさんあるが、国語の勉強のためにはピッタリというのがない。」というような批判を、わたしどもは、ときどき教育の現場におられる先生がたからお聞きします。ある辞典は語の数が少なく、勉強のためにも日常の必要に対しても、役だたぬ場合が多かろうと思われます。また、当用漢字の使い方や送りがなのつけ方について、語の標準的な書き表わし方をはっきり示した辞典といえは、これは今のところほとんど見当たりません。

そこで、わたしどもは、こういう欠点をうずめて、辞典としてほんとうに利用価値の高い辞典を作り出したいと思ひました。

○国語科だけでなく、高等学校・中学校のすべての学科の学習に必要なことばを取り入れる。

○現代の社会生活に必要なことばを、最近の新しいものにいたるまで取り入れる。

○高校生の学習に必要な基本的な古語、中学生に必要な古語ももれなく取り入れる。

○単語だけでなく、ことわざや慣用語のおもなものを、もらさず取り入れる。

○語義の説明をわかりやすく、ていねいにし、さらに同意語・反対語を示したり、適切な例文をあげたりして、説明を補うようにする。

○文法に関する説明、語の用法についての説明などとなるべくくわえて、その理解や使用のうえに役だつようにする。

○「当用漢字表」「当用漢字音訓表」「現代かなづかい」「送りがなのつけ方」にしたがって、一つ一つの語の標準的な書

き表わし方を示す。

以上のようなことがらを基本の方針に立てて、高校生・中学生の学習国語辞典として、また一般社会生活上の必要に応ずる国語辞典として、ほんとうに役にたつものを作ろうと、わたくしどもは数年間にわたって、編集の仕事を続けてきました。この仕事はたいへんほねがおれましたが、今やっと最初の目標をほぼ達成できたという喜びを味わっています。もちろんふじゅうぶんな点がないとはいえませんが、今後、この辞典をお使いくださる皆さんのお力をお借りして、さらに完全なものに育てあげていきたいというのが、わたくしどもの念願です。

辞典の編集に深い経験をもたれる今井正視、現代語の研究に深く心を入れておられる大石初太郎の二氏に、本書の編集委員として、ご協力をいただきましたことは、わたくしどもの、深く力強く思うところです。なお、そのほか、いちいちお名まえはあげませんが、この辞典のためにお力添えをいただいた大ぜいのかたがたに、ここにこころからお礼を申し上げます。

昭和三十四年八月一日

金田 一 京 助
佐 伯 梅 友

改訂に当たって

この『新選国語辞典』の初版が出てから今日まで、まだ二年あまりしかたっていないませんが、わたくしどもは、ここに改訂版を出すことにしました。

この辞典が思いのほかの好評をもって世に迎えられただけに、小さなミスや不備が目につくたびに、編者としては、はなはだ心苦しく思ったからであります。人間のする仕事に完全ということはありえない

とはいうものの、大事な言語生活や国語学習の案内役となるべき辞典をきずをもったままにしておくことは、生み出した責任者として、心安らかでおられるものではありません。そこで、改訂を一日も早くと急いで取り運んだのでありますが、どうせ手を加えるからにはと欲を出して、見られるとおり、分量もはるかに多く、旧版とはすっかり姿を変えたものを作りました。

改訂の第一の目標は、旧版のあちらこちらに残された小さなきずを直すことではしたが、その場所の修正だけをするというのではなく、全面的に再検討を加えて手入れをするというやり方を取りましたので、語の書き表わし方（標準的な表記など）、品詞、意味の説明、用例その他、すべての面にわたって、ずいぶん改めるところがありました。

同時に、一方、力を注いだことは、この辞書に取り入れる語の取捨でした。今度新しく加えた語の数は、全部で約六〇〇〇語にのぼりましたが、そのうち、最近の新語あるいは新しい外来語の類が約四六〇語あります。これらはいずれも現代生活の広がりにしたがって近年生まれたり輸入されたりしたものです。たとえば、その一つに「公害」という語があります。この語は近年一つの社会問題にかかわる語として盛んに行なわれているにもかかわらず、最近の国語辞典でこの語を

昭和三十六年十二月一日

新版について

流動変化の激しい現代の生活の中にあつては、ことばの変化もまた著しい。もちろん、日本語の中の大部分は、十年、二十年、三十年、五十年、変わらぬ意味・はたらきをもって日本語の本体を形成しているといえるが、それらの周辺にあつて、時の動きを反映して変化してゆくことばの相を、決して軽く見ることはできない。ことに、単語の生滅にせよ、意味・用法の変化にせよ、そのようなことばの変化は、

収めているものがありませんでした。（なお、古く「大日本国語辞典」―大正八年刊―が、この語をあげているのを発見しました。）

そのほか、新しく加えた語の中に、古語の一八二語があります。旧版に収められていたものと合わせると、これで、古典を読む際に会える基本的、一般的な古語はほとんど取められたと考えます。

次に、文学史関係の固有名、すなわち、作家・作品の名を今度新しく入れることにしました。これが約二〇〇語で、中学・高校の学習に関連する範囲のものを一応全部取めたつもりです。

以上の仕事のために、特に、鈴木重幸・曾根 脩・田中章夫・外山 映次・松延市次・吉沢典男の諸氏のご協力を得ました。

ここに新版を送り出すことを喜ぶとともに、わたくしどもは、この辞典の充実のために、今後とも力を尽くしたいと考えます。

編集委員会

おおかた、現代の生活に密着して起こるものであるから、現代の言語生活のためには、これらを重視しないわけにはいかない。だから、改めて述べるまでもなく、現代の生活に役立つべき国語辞典は、当然、現代国語語彙の中核をなす基本語の単語の類の解説にじゅうぶんを期するばかりでなく、同時に新しい変化の要素をも怠りなく取り込んで、適切な解説記述を加えるものでなければならぬ。

この辞典は、初版発行以来、すでに再三の改訂を行ってきたが、このたび、時の流れに従う要求のもとに、また、版を改めることにした。すなわち、前回昭和四十年の改訂の直後から準備を進めて、徹底的な全面改訂を行い、今日の中学校・高等学校における学習を助ける辞書として、また、一般の社会生活上の必要に応ずる辞書として、一段と信頼性の高いものにしあげることが期した。

改訂の重点を具体的に説明すれば、次のとおりである。

(一) 現代語約三五〇〇語を新しく収録した。この中には、近年新しく発生して、今日の国語語彙の中に欠くことのできないものとなっている新語・外来語の類から、中学校・高等学校の各教科にわたる学習語彙の類を、多く含む。

(二) 高等学校国語科の学習上必要とする範囲を目安として、古語をさらに約三〇〇語新たに取り入れた。また、古語には、出典を明らかにして古典の用例を示した。

(三) 文学作品名は、このたび、作家名と同様に、明治以後今日にいたる近代文学まで範囲を広げ、そのおもなものを取り上げて、簡明な解説を施した。

(四) 「当用漢字音訓表」「送り仮名の付け方」(昭和四十八年六月十八日内閣告示)によって、各語の標準的な表記を示した。(旧音訓表に対し新しく加えられた音訓は、特別に記号を付け、従前のもの

と区別して示した。

(五) 同法(同記)の記号のもとに、随所に必要な説明を加えた。すなわち、同法では、同種・同類の語の使い分けなどについて、(同記)では、語の書き表し方で注意すべきことについて、説明を行った。

(六) 巻末に新しく「漢字解説」のページを設けた。ここでは、当用漢字を中心とする重要漢字二四七八字を選び、その個々について、音訓・意味・用例および難読の熟語等を示した。現代の幅広い読み書きのための必要に応じようとしたものである。

(七) その他、全面的に各語の解説を再検討して、よりの確、適切な記述に改めたところが多い。付録についても、必要な修正を加えるとともに、付録のうちのいくつかを、いっそう有効と思われる別種のものに取りかえた。

以上の改訂作業のために、川上弘見・高島文三・土屋信一・松延市次・渡辺倫太の諸氏に、各種の部面に関して協力を仰いだが、とくに、作業の広範囲にわたって多くの労をわすらわしたのは、次の四氏であった。

曾根 脩 田沢恭二 外山映次 野村雅昭

われわれの多年の労苦に成るこの辞典の新版が、多くのかたがたのために役立つよう、折ってやまない。

昭和四十八年七月一日

編集委員会

この辞典を使う人のために

一 収めた語の範囲

この辞典は、一般社会生活用、および学習用の国語辞典として、必要な現代語を漏らさぬことを期したが、そのほか、とくに次のような範囲の語を収めた。

中学校・高等学校の国語科学習に必要な基本的な古語。

日本のおもな文学作品・作家名、特殊な歴史的事件、国名、その他の固有名詞。

接頭語・接尾語等の語の構成要素、また、おもな慣用句・ことわざなどの連語の類。

以上を合わせて、この辞典には、約七万三八〇〇語を収めている。

二 ことばをさがすために

この辞典に収められている語は、大多数が、ひらがなの太字で、少数が、かたかな、あるいは漢字かなまじりの太字の見出しで示されている。

I 見出しの示し方

(1) 和語・漢語の単語は、ひらがなで示した。そのうち、

(a) 現代語は現代かなづかいで示した。

(b) 古語は歴史的かなづかいと現代かなづかいの両方を見出しを立て、歴史的かなづかいの見出しのもとに解説をつけた。

(例) しょうかん【傷寒】^① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝

- (b) はなしあう【話(し)合う】【話し合う】……話(し)合い【話し合い】
 五段活用動詞に対する可能動詞。

(例) よむ【読む】【読む】……眺める【読む】……眺める【読む】……眺める【読む】

あつかう【扱う】【扱う】……扱える【扱う】……扱える【扱う】

- (c) 形容詞・形容動詞の語幹に「がる」の付いてできた動詞、「げ」の付いてできた形容動詞、「さ」の付いてできた名詞など。

(例) かなしい【悲しい】【悲しい】……悲しがる【悲しい】……悲しがる【悲しい】……悲しがる【悲しい】

しずか【静か】【静か】……静か【静か】……静か【静か】……静か【静か】

- (7) 動詞・形容詞の文語形を、歴史的かなづかいで添えた。

(例) いえる【いえる】【いえる】……いえる【いえる】……いえる【いえる】……いえる【いえる】

おしい【惜しい】【惜しい】……をし【惜しい】……をし【惜しい】……をし【惜しい】

- (8) たとえば「地雷」と「地雷火」、「ダスター」と「ダスターコート」とのように、二つの形が同じ意味である場合、見出しを次のように示したことがある。

(例) じらい【か】【地雷(火)】

ダスター【コート】

接頭語・接尾語などの見出しは、その下または上にを付けた。

(例) こー【御】

うすー【薄】

ーし【氏】

ーさつ【冊】

(10) 見出しの中の「は」、活用する語の語幹と語尾との切れ目を示したものである。

(例) うつる【移る】【自五】

たかい【高い】【形】

ゆめみる【夢見る】【自他止】

(11) 見出しの中の「は」、その語の成り立ち上の切れ目を示したものである。

(例) しんかん【新刊】【名】

きまよい【気迷い】【名】
 きまきだに【連動】……

ただし、これは主として第一次的な切れ目を示すのに用いた。たとえば、ちようおんそく【超音速】のように示し、ちようおんそくのように示さない。

II ことばの並べ方

- (1) 五十音順に並べた。

(2) 同じつづりでは、促音(そくおん)・拗音(ようおん)を、直音より前に置いた。

(例) じつき【実記】

じつき【地突(き)】

きよい【虚位】

きよい【清い】

しや【斜】

しや【視野】

(3) 清音・濁音・半濁音の順とした。

(例) ホール【hall】

ボール【ball】

ポール【pole】

(4) 同音の語では、

(a) 和語・漢語のあとに、外来語を置いた。

(例) こおる【凍る】

コール【call】

(b) 接頭語・接尾語・名詞・代名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞の順とした。

三 ことばの書き表し方を知るために

- (1) 【】の中に教科書体活字で示したものは、当用漢字表・当用漢字

音訓表・当用漢字字体表・現代かなづかい・送り仮名の付け方などによった、現代の標準的な書き表し方である。

(例) あつめる【集める】〔簡下〕

ことこまか【事細か】〔簡下〕

つみふかい【罪深い】〔簡下〕

なお、「**一**」の中に示したもののうち、当用漢字音訓表（昭和四十八年六月十八日内閣告示）で新しく加えられた音訓については、これを従前のものと区別できるよう、右肩に「**一**」を付けて利用の便宜をはかった。

(例) あけはなす【**一**開け放す】〔簡下〕

〈付記〉 当用漢字音訓表の前書きの中に、「この表は、法令・公用文書・新聞・雑誌・放送など、一般の社会生活において「当用漢字表」に掲げる漢字によって現代の国語を書き表す場合の音訓使用の目安を示すものである。」「この表の運用に当たっては、個々の事情に応じて適切な考慮を加える余地のあるものである。」と述べている。この辞書で「現代の標準的な書き表し方」といっているのは、右の音訓表の主旨をふまえたもので、とくに音訓に関しては、一般社会生活での目安となる書き表し方という考え方を中心として、標準的な書き表し方を示そうとしたものである。

なおまた、学校教育においても、これが大体、指導の範囲を示すものになると考える。

(2) 標準的な表記として二様を認めてよいと思われるようなものは、「**一**」の中に並記した。

(例) かならず【**一**かならず**一**必ず】〔簡下〕

げきつう【激痛・劇痛】〔簡下〕

意味・用法によって表記のしかたが変わるときは、次のように示した。

(例) (a) つくり【作り】〔簡下〕 (b) 造り【つくりぐあい。つくりかた。でき。】

「この品は**一**がいい」 ②化粧。「おー」 ③さしみ。「たいの**一**」
(b) おもいきりば。●「思（い）切り」〔簡下〕 思いきること。あきらめ。
「**一**がいい」●「思いきり」〔簡下〕 おもいうぜんぶん。「**一**あはれる」
(a) は【作り】が全体を通じて用いられ ①の場合に「造り」も用いられることを示す。

(b) は●の場合に「思（い）切り」、●の場合に「思いきり」と、使い分けられることを示す。

(4) 「**一**」の中にふつうの活字（明朝体）で示したものは、それ以外のおもな慣用的な書き表し方である。

右肩に「**一**」を付けた漢字は当用漢字表外のもの、▲を付けた漢字は当用漢字音訓表外の読み方に使われているものである。

(例) こんごう【混交】〔混濁〕 図同サ

のれん【のれん】〔暖簾〕 図

当用漢字表などによっても、その語の書き表し方として標準的なものと考えにくいものなどは、この取り扱いにした。

(例) つきあい【つきあい】〔付合〕
もしや【もしや】〔若しや〕

また、「**一**」で示す書き表し方がなく、「**一**」の書き表し方だけをかけたものもある。

(例) あんきょ【暗渠】

かんきん【看経】

らんじゅほうしょう【藍綬褒章】

(5) 古語の類の書き表し方はすべて、「**一**」に入れて明朝体で示した。

(例) いたづら【徒ら】

うへびと【上人】

(6) 人名・地名・書名などの固有名詞の書き表し方はすべて、へんに入れて明朝体で示した。これには・や▲を付けたかった。

(例) きのつらゆき【紀貫之】

こうしゅう【甲州】

- (7) まんようしゅう〈万葉集〉
ふつう、かな以外の書き表し方の行われない語は、見出しのかなでそのまま標準的な書き表し方を示した。

(例) けち〔附〕
さもし〔附〕

- (8) 外来語は、見出しのかたかなでそのまま標準的な書き表し方を示した。

なお、への中にもとの外国語を示した。外国語の頭に付けた小文字のイ・フ・ヤなどは、イタリア語・フランス語・中国語などの意味である。それらの小文字の付いていないものは英語である。(「略語表」を見よ。)

(例) テーブル〈table〉〔附〕

アルト〈alto〉〔附〕

ネグリジェ〈 negligée 〉〔附〕

- (9) 漢字かなまじりで見出しを示したものは、なるべく標準的な書き表し方によろうとしたが、時に、それによらないものとする。

(例) 霄壤〔附〕
量明〔附〕

量明〔附〕

- (10) たとえば、「大当たり」大当り、「踏み込み」踏み込み、「乗り換え」乗換え・乗換のように、送りがなを省いてもよい場合は、「大当(たり)」「踏(み)込み」「乗(り)換(え)」のように示した。また、「表す」表わす、「断る」断わすのように送りがなを多くしてもよいものについては、「表す(表わす)」「断る(断わす)」のように示した。

(11) たとえば、「えんこ」(円滑)、「りゅうぶ」(流布)のような誤り形は、相当する漢字を「」に入れ、★をつけていない。(品詞名も示さない。)

四 意味・用法を知るために

- (1) 意味が二通り以上に分かれているものは、だいたい、もとの意味

あるいは基本的な意味を①とし、それから転じてうまれた意味を②③……とするようにした。しかし、転じてうまれた意味がおもに使われるような場合は、逆にした。

品詞・活用のがう場合は●……と分け、必要に応じ、その中をさらに①②……と分けた。

(例) だいいち【第一】●〔附〕①いちばんはじめ。最初。「一の巻」もつとたいせつなこと。「健康」●〔附〕①いちばんに。まず。

さしあたり……それがよくない

- (2) 1は反対語である。反対語は原則として、解説のあとに置いたが①②……と分かれた意味の全部に対するものは、①の前に置いた。

(例) しょうにん【小人】〔附〕①こども。②大人

おんなやく【女役】〔附〕①……②……

- (3) 用例の中では、その語をーで示した。

(例) あい「相」……「よい時候にーになりました」

せいしん【誠心】〔附〕……「ー誠意」

- (4) 1は「見よ」のしるしで、説明のある場所を示したものである。これは標準的なことばでないもの、ごく似たことばではかにいっそう一般的なものがある場合、古語で歴史的かなづかいによらない見出しの場合などに使った。

(例) いきさま【行(き)先】〔附〕①ゆきさま。

かんによ【官女】〔附〕かんじょ。

あしろう【垂相】〔附〕古語)あしゅう。

五 その他のいろいろな知識のために

- (1) 歴史的かなづかい

和語で、歴史的かなづかいが、見出しの現代かなづかいと違うものは、歴史的かなづかきを、ひらがなの小文字で示した。

(例) あおい【青い】〔附〕あおい

さそいみず【誘い水】〔附〕……

《伊勢》	伊勢物語
《伊曾保》	伊曾保物語
《雨月》	雨月物語
《宇津保》	宇津保物語
《榮華》	榮華物語
《落窪》	落窪物語
《蛸蛉》	蛸蛉日記
《源氏》	源氏物語
《古今》	古今和歌集
《後拾遺》	後拾遺和歌集
《後撰》	後撰和歌集
《今昔》	今昔物語
《更級》	更級日記
《拾遺》	拾遺和歌集
《書紀》	日本書紀
《新古今》	新古今和歌集
《盛衰記》	源平盛衰記
《竹取》	竹取物語
《著聞集》	古今著聞集
《堤中納言》	堤中納言物語
《徒然》	徒然草
《土佐》	土佐日記
《平家》	平家物語
《平治》	平治物語
《保元》	保元物語
《枕》	枕草子
《万葉》	万葉集

